



平成 29 年 4 月号 (第 41 巻第 2 号・通巻第 166 号)



右絵は岩崎灌園『本草図譜』に描かれたリュウガン

竜眼 (リュウガン)

ムクロジ科リュウガンは中国南部、インドなどで果樹として栽培される常緑小高木。樹高 10 m、春、初夏に黄白色の芳香花を多数つける。熟した果実は直径約 2 cm の球状。な

かにある大きな黒い種子を竜の目に例えて竜眼と命名。漢方では果肉を「竜眼肉」と称し、疲労や不眠、健忘症などに用い、帰脾湯や加味帰脾湯に配合される。(坂田 幸治)

自然の恵み生薬

2



漢方診療部 部長 鈴木 邦彦

平成 27 年 4 月号では薬の

起源や民間薬の解説をしましたので、今回はさらに生薬についての話をいたします。

植物・動物や鉱物が薬として使用されるようになったのは、人間の長寿に対する願望

から生まれたものであり、中国の古い薬物学書には、ある生薬を長く服用すると「軽身不老」または「軽身耐老」となる、という表現が多くみられます。とくに強壯、強精の薬を求めることは今も昔も

変わらず、ある種の薬草については誇張された伝説を交えて、あたかも真実であるかのように説明されて、現代に

おいてもそれが広く流布されています。そのなかの代表的な生薬のひとつがオタネニンジン(御種人參、ウコギ科)で、一般には朝鮮人參、高麗人參として知られてい

ます。江戸時代には主要な臓器の機能を高めて体力を増強すると考えられ、万病に効果ありとして多くの信仰を得ていました。このような状況のなか需要が高まり価格が高騰し、御種人參を輸入するために大量の銀が国外に流出しました。そこで享保 13 (1726) 年に八代將軍徳川吉宗はこれを国産化することを先行し、当時朝鮮との外交や貿易に携わっていた対馬の宗家から献上された 60 粒の種を日光今市の地にまき栽培に成功しました。これが各地の殿様に配布され、敬った表現として「御種人參」と呼ばれるようになったわけです。国産品が多く流通することで価格が適正となり、輸入量も減らすことができました。主な栽培地としては福島県会津高田町、長野県

丸子町、島根県大根島がありますが、直射日光と高温多湿を嫌う性質から、国内栽培は非常に難しいとされています。その薬効については、胃腸や呼吸器の働きを活性化させ、生体の持つ免疫機能を高める作用があり、強壯、強精、消化促進、精神安定、強心、保温などの幅広い効能が示されています。皆さんもご存じの人參湯、大建中湯、六君子湯、十全大補湯、補中益氣湯など多くの漢方薬に配合されています。このように江戸時代において不老長寿にかかわる薬がもてはやされたようですが、貝原益軒が 83 歳で著した『養生訓』では「長生の薬なし」と題して「むかしの人も術者にたぶらかされて、長寿の薬というものを聞いた人が多いがその効果はなく、かえって薬にそこなわれた人がいる」と述べてあり、薬物よりも養生の重要性について説いていることは注目すべきでしょう。健康の基本は何よりも日常生活にあります。東洋医学の診療のなかで、正しい養生法を

丸

お伝えすることは大変重要な使命であり、私どもも日々学びを深めています。

最後に我國の生薬事情の概要について紹介します。昨年、日本漢方生薬製剤協会から原料生薬使用量等の調査に関する2013、14年分の結果が公表されました。それによると2014年における漢方製剤等の医薬品に使用された生薬の種類と数量は266品目、2万5419トンで、2008年と比較すると数量では4700トン(約22%)の増加となっています。生薬の生産国の割合



オタネニンジン

は、2014年では日本国内産102%、中国産78%、残り11%がその他の国のものという状況で、これについては2008年の傾向と同様でありました。現在、農林水産省ならびに厚生労働省の支援による薬用作物の国産化に向けての試作栽培等の取り組みが進められ、今後は日本産生薬の生産量増加が期待されています。

「第2回WHO西太平洋地区フォーラム」 「Second regional forum of WHO Collaborating Centres in the Western Pacific」に参加 小田口 浩

東洋医学総合研究所 所長

小田口 浩

昨年(2016年)11月28

日と29日、フィリピンのマニラにあるWHO西太平洋地区事務局において「第2回WHO西太平洋地区フォーラム」Second regional forum of WHO Collaborating Centres in the Western Pacific」が開催され、参加して参りました。

ご存じの方もいらっしゃると思いますが、私たちの施設はWHO伝統医学協力センターに指定されており、WHOに関する様々な活動を行っております。同センターであることを示す金色の看板が玄関脇に掛けてありま

すので、当施設に出入りする際は注目してみてください。

WHOというと新型インフルエンザやエボラ出血熱に対する対応など、感染症に對する活動を思い浮かべることが多いと思われませんが、WHOは伝統医学も重要視してあります。なぜならば世界の発展途上国の多くにおいて、大多数の国民は西洋医学による治療を受けることが困難で、伝統医療に頼らざるを得ない現状があるからです。これらの国の伝統医療は日本の漢方医療のように体系化されておらず、医療を行う資格も曖昧であることがほとんどです。したがって現在伝統医療で問題となっているのは、実はその効果の有無よりも、伝統医療を受けたことにかえって患者さんが害されているのではないかと懸念です。そのためWHOは、安全な伝統医療を提供する体制がしっかりしている日本などに対してそのノウハウを世界に発信するよう求めています。特に当施設は伝統医療の中核を

なす生薬治療(漢方薬治療)と鍼灸治療の双方を実践しており、かつ、安全な医療の提供を重視している施設としてWHOからこの分野での大きな協力を期待されており、

さて、今回のフォーラムに参加したのは西太平洋地区の約170のWHO協力センターの代表たちです。

西太平洋地区とは、世界地図を思い浮かべていただき、太平洋の左側にある大きな中国、韓国、日本、南に下つてベトナム、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランドなどととともに、ツバルやソロモン諸島といった小さな島国も含む地域を指します。フォーラムではこれらの島国も含んだ西太平洋地区固有の課題を参加者で共有し、2015年に国連で採択された「持続可能な開発目標」(sustainable development goals (SDGs))達成のためにWHOあるいはWHO協力センターの立場で何を行えるかを話し合いました。具体

的には、貧困に苦しむ人たちであっても最低限の医療を受けられる環境を整えてあげる必要があり、そのためにWHOあるいはWHO協力センターは何をすべきか、といった課題が話し合われました。伝統医療領域固有のセクションでは、伝統医療においても免れることのできない副作用に関する情報がいかに収集し、共有するかという重要なテーマについて議論が深められました。

なお、本フォーラム開催時期、日本ではフィリピンのドゥテルテ大統領の強権的な政治手法が話題になっておりましたが、マニラは至って平穏で、以前と同様の街の賑わいを見せておりました。



舌画像撮影への

ご協力をお願い

漢方診療部 川鍋伊晃



昨年末から当研究所漢方外来におきまして、初診の患者様を対象に、舌を撮影して画像を解析する臨床研究を開始いたしましたので、ご紹介させていただきます。

漢方診療および鍼灸診療では、個人の心や身体の状態を推測し、体質に合った処方や治療を選択する上で、舌の色や形を評価することはとても重要な要素になります。当研究所漢方外来での通常診療におきましても、身体診察の一環とし



て、脈やお腹と合わせて毎回拝見させていただいております。

通常私たちが舌の性状を診るときには、表側と裏側を観察します。まず、表側では苔と苔以外の舌体の状態を評価します。苔の色や厚みから、内臓の具合やストレス度などを推測します。例えば、白くて厚い苔からは胃腸機能の低下、歪に剥げ落ちた苔からはストレスの関与などが示唆されます。また、舌体の色や形から、血液循環や水分バランスの状態などを推測します。例えば青みが強ければ血液循環の滞り（瘀血）、舌の周辺に歯形がついていればむくみ（水滯）、舌体に複数の溝を認めれば潤い不足（血虚）などの病態が示唆されます。一方、裏側の観察では、表面静脈の怒張の程度が強ければ、血液

循環の滞り（瘀血）が疑われます。これらの所見と問診などの情報も踏まえ、患者様の体質や病気の進行度、精神状態などを総合的に判断しております。

しかし、その評価に際しては、診療者の経験や暗黙知を拠り所としており、誰もが所見を共有できるような、基準となりうる評価方法がなく、診断結果にバラつきが生じ、伝統医学の発展普及を図る上で支障となっておりました。

そこで、正確な舌の性状の評価を目的として、高い色再現性を有し形状認識も可能な診療支援システムの構築を目指して、4年前から富士通研究所と共同で舌画像解析システムの開発を進めてまいりました。将来的な製品化を目指し、センサーの完成度を高めるために、この度外来での臨床研究を開始させていただく運びとなりました。

撮影で得られた舌画像データと外来医の診断との相関を分析し、舌性状の解

析アルゴリズムの開発を今後進めてまいります。信頼性の高いアルゴリズムの開発を目指す上で、より多くの患者様にご協力いただいでデータを集積していくことが不可欠になるため、皆様にご協力賜れましたら幸いです。現在は撮影のみのため、結果に関するレポート等をお渡しすることはできませんが、将来的には皆様へ結果をフィードバックできるように開発を進めてまいります。

尚、この研究への参加はあくまで自由意思に基づいておりますので、研究の趣

旨に同意いただける方のみ、初診時の診察前に検査室で撮影をお願いしております。痛みなどの侵襲を伴うものではありません。また、研究への参加を見合せたり、撮影後に研究協力の意思を撤回されても、診療への影響はありませんのでご安心下さい。

今後のさらなる漢方医学の普及や国際化標準化も視野に、研究成果を継続的に国内外に発信し、基礎と臨床、伝統医学と現代医学の懸け橋となるような取り組みを進めていきたいと考えております。

「第4回鍼灸医学史

研究発表会」開催

医学史研究部 加畑聡子



本年度6年ぶり4回目となる「鍼灸医学史研究発表会」が平成29年1月8日（日）に北里大学白金キャンパスにて開催されました。北里大学東洋医学総合研究所と日本内経医学会の共催となる本会は、東洋医

学古典及び医学史の発展と啓蒙を目的としたものであり、毎回、各専門分野において第一線で活躍される先生方が、それぞれの研究成果に基づいて発表を行います。今回は、『黄帝内経』理論、鍼灸学教育、医学史



小曾戸洋先生

などをテーマとして、幅広い枠組みの中で、東洋医学古典の歴史や解釈について発表されました。

岡田隆氏（トライデントスポーツ医療専門学校教員）「『新版 東洋医学概論』の内容紹介と雑感」では、現在鍼灸学校で採用されている東洋医学概論の教科書について、中における歴史の変遷を踏まえての理解が述べられました。左合昌美氏（日本内経医学会講師）「刺之微在速遲」は、『靈枢』「九鍼十二原」に記載される「刺之微在速遲」という記載について、これまでの医書における引用に基づき、字義を踏まえ

て詳細に論じられました。津田篤太郎氏（聖路加国際病院リウマチ膠原病センター副医長）「疾醫」と陰陽醫のパラダイムと和田啓十郎・没後100年」

では、明治末から大正時代に活躍した医者・和田啓十郎の没後100年を記念して、その経歴及び業績が紹介されました。林孝信氏（日本内経医学会講師）「三焦と心包概念の変遷と、楊上善の見解」では、『素問』『靈枢』を初めて

する中国医書に見える三焦と心包の概念について、語義的解釈とともに、楊上善の見解が論じられました。宮川浩也氏（日本内経医学会会長）「『素問』『拳痛論』の九気について」は、「拳痛論」に記載される氣と感情との関係性に触れること

によって疾病が発生するメカニズムを明らかにし、日常生活の過ごし方や治療方法について論じました。小曾戸洋氏（北里大学客員教授）「古活字版医書と鍼灸」では、現存する古活字

版医書について、紹介と研究の展望が述べられました。全国各地から鍼灸学、医学、薬学、歯学などの分野における臨床家及び研究者を中心に、90名もの参加者があり、質疑応答では、それぞれの専門領域の観点から、活発な議論、意見交換がなされました。鍼灸の源流である東洋医学古典の重要性についてあらためて考えさせられる、素晴らしい機会になったと思います。

本会の開催が、業種や学問的背景を超えた、東洋医学古典及び医学史の発展と啓蒙につながることを期待されます。



漢方レジデントを終えて

漢方診療部 レジデント 青木 ゆかり

2015年4月から2017年3月までの2年間、研修をさせていただきました。研修前は内分代謝内科を専門とし、主に糖尿病患者の診療を行っていました。

私が漢方と出会ったのは、医師9年目頃の事です。現在の日本の医学部教育では漢方医学の授業が組み込まれていますが、私が在学していた頃は、まだ西洋医学の教育のみでした。

教育を一度も受けていない私にとって、漢方医学の学問体系は未知の世界でした。病気を診断して治療をする西洋医学と違い、漢方は患者の自覚症状を重視し、「証」を決定して治療にあたるため、全く考え方が違います。

研修当初はわからないことばかりで戸惑いの日々でしたが、漢方を本格的に勉強している先生方の指導の

下、多くの事を勉強させてもらいました。漢方の基礎となる陰陽、虚実、気血水、六病位概念をはじめ、「証」を見極めて行う湯液治療の数々、また、直に生薬に触れられるため、実際に自分で試飲等を行い、他ではできない研修内容でした。

西洋医学はとてもしばらしい医学ですが、診断できない自覚症状も多々あります。そういった症状に対しては漢方治療が最適です。研修は終了しますが、今後も漢方治療に携わっていきたいと思っています。2年間はとても早く、有意義な時を過ごすことができました。



鍼灸師レジデントを終えて

鍼灸診療部 レジデント 近藤 亜沙



鍼灸師レジデントは、現
鍼灸診療部部長の伊藤剛先
生が発足させた鍼灸師教育
のための日本初となる制度
で、私は第7期生になりま
す。診療のフォローや、勉
強会で症例検討会などを担
当し、また昨年の10月から
外来を受け持つことにな
り、鍼灸の知識を得ると同
時に臨床経験を積むことが
できました。

当研究所には貴重な古典
の資料が多くあるため、今
まで知らなかった歴史を学
ぶきっかけとなり、ここに
いるからこそ古典の大切さ
に気付かされたと思いま
す。また、勤続年数の長い
先生方も多くいらっしゃる
ので、当科を立ち上げた岡
部素道先生など今の鍼灸を
支えてきた先生方について
のお話を伺うことができた
ことはとても貴重な経験で
した。さらに、臨床経験の

豊富な医師と一緒にいるこ
とで西洋的な知識も得るこ
とができました。漢方、薬
局や研究部など様々な部署
があり、東洋医学を広い視
点から見るところにいること
で価値観を広げられたと感
じています。

この2年間はとても有意
義でこのような環境で過ご
せたことをうれしく思いま
す。指導してくださった伊
藤剛先生をはじめ、鍼灸診
療部の先生方に深く感謝い
たします。またレジデント
を終えるに当たり、来年度
から外来数が増えるので今
後ともよろしくお願いいた
します。



北里大学近辺の

おすすめランチ2

事務室 係長 新地 敏博



平成28年10月号で紹介さ
せていただきました北里大
学近辺のおすすめランチの
続編として、今回は当研究
所の先生が通うお店を紹介
したいと思います。

まず初めに当研究所4代
所長の花輪教授ご愛用のお
店が、当研究所から徒歩3
分にある「長寿庵」(ランチ
日曜^②)という蕎麦屋さ
んです。花輪教授は1年間、
暑い日も寒い日もこのお店
から出前を取っています。
秘書室から折漏れてく
る出前を注文する声から、
夏は毎日「冷やしトロ口蕎
麦大盛り」、それ以外の季節
はほぼ「温かいトロ口うど
んの大盛り」しか頼んでい
ないということを知ってい
ます。

この疑問を花輪教授に尋
ねてみたところ、夏の「冷
やしトロ口蕎麦」は、当研
究所3代所長大塚恭男先生
からの継承で、外来で診療
が延びても麺が伸びないと
いう理由からなのだそうで
す。「トロ口うどん」を頼む
のはただ単に好きだから、
ということも毎日食べても
飽きないそうです。こちら
に関しては、麺が伸びてし
まうので外来が終わってか
ら注文するそうです。

また、なぜ出前なのかに
ついてもお話し下さいまし
た。なんでも、これも大塚
先生からの継承だそうで、
所長就任時に所長はいかな
る時も研究所に問題が発生
した際に対応する責任があ
るため、外出をしないよう
にとの教えを受けたためだ
そうです。ちなみに所長に
なる前は1週間ローテー
ションを組んで、いろんな

お店のランチを楽しんでい
たそうです。

続いて漢方外来の星野先
生の行きつけのお店は、洋
食「カフェドローズ」(ラン
チ日曜^⑦)です。前述「長
寿庵」のすぐ隣にあります。
私はこのお店には入った
ことがないので、食ペロ
グで調べてみました。

口コミには、「素敵なマダ
ムのいるお店」、「コーヒー
が美味しい」・・・残念なが
らこの2件しかありません
でした。

なぜ、このお店に通うの
か、味なのか、それとも他
に理由があるのか、星野先
生に伺ってみました。

「このお店にはランチメ
ニューが1品しかなく、選
ばなくてよいから!」との
ことでした。お店は昭和の
洋食屋さん風で、ボリュ
ムもあり味も良いそうです。
ただし、昼12時オープン
の時間帯は混み合うので、
この時間を外した方が良く
もしれませんとのことだ
した。

なお、「素敵なマダム」に

ついでには首を傾げていました。このようなお店の位置情報を「白金キャンパス〜ランチマップ〜」として会計

窓口にご用意しておりますので、お時間のある時にご利用になられてみてはいかがでしょうか。

江島杉山神社参拝

鍼灸診療部

井田剛人



今年、19年ぶりに日本人横綱が誕生しました。その熱狂の舞台となった国技館のある「両国国駅」から徒歩15分程の処に今回参拝した江島杉山神社があります。

鍼灸診療部の恒例行事となったこの参拝は、今年で6年目となります。伊藤剛鍼灸部長をはじめ、鍼灸診療部のスタッフ、研修生の有志で初詣を兼ねて折袴を行ってまいります。また隔年で神奈川県藤沢市の江ノ島神社と東京都墨田区にある江島杉山神社を交互に参拝しており、今年は1月9日の成人の日に行って参りました。

江島杉山神社は、明治期に江ノ島弁財天を祀った江島神社と、江戸期に活躍し

た鍼灸師の杉山和一を祀った杉山神社が合祀されて江島杉山神社となり、鍼灸に大変縁のある神社となっております。弁財天は全ての願いをかなえてくれる神様ですが、特に芸能上達に通じているようです。また、一方の杉山和一について少し紹介させていただきます

と、和一は幼少の頃に伝染病にかかり失明し、江戸に出て盲人鍼医である山瀬琢一に入門した後、信仰していた江ノ島弁財天の岩屋にこもり修行を行います。満願の日、岩につまずいた和一の手に偶然、枯葉のくるまった松葉が刺さり、それをきっかけに管鍼術(筒状の管を使って鍼を刺す方法)を考案したとされてい

ます。その後、京都にて入江豊明に弟子入りし、鍼名人と謳われるまでに成長します。再び江戸に戻り、その名声を聞いた時の將軍徳川綱吉に、和一は「扶持檢校」として召し抱えられることとなります。また杉山和一は、天和2年(1682年)に世界で初めて視覚障害者のための学校である杉山流鍼治稽古所を開設し、視覚障害者に鍼、按摩の教育を行った人物として有名です。

杉山神社にて鍼灸の上達と発展を祈願した一行は、同じ両国にある江戸東京博物館を見学し、江戸東京の文化と歴史にふれ、昼食には両国名物のちゃんこ鍋をいただきます。来年は藤沢市の江ノ島神社へ参拝する予定です。



漢方豆知識

ハス

薬剤部

竹原郁代



「蓮」という植物から想い浮かぶ景色は、不忍池でしょうか。あるいはモネの絵画「睡蓮」でしょうか。

池に瑞々しく咲く姿は、一見、同じ植物のように見えるため、従来、共にスイレン科とされてきました。蓮と睡蓮は「蓮」の文字を含みますが、現在では遺伝子解析により蓮はハス科に、睡蓮はスイレン科に分類されます。

各々の特徴としては、蓮は地下茎があり、丸い葉と花が水面から顔を高くのぼります。一方、睡蓮は球根から切込みのある葉と花が水面に浮かびます。

蓮は、マレー半島あるいはインド原産の植物で、欧州東南部からアジア・オーストラリア北部に広く分布します。日本には仏教とともに渡来したという説もありますが、有史以前に渡来したと推測されます。

蓮は元々、成熟した花托(蓮房)が蜂の巣に似ていることからハスとなり、それが訛ってハスと呼ばれるようになった。花から根までの様々な部位が余すことなく食用・薬用として使われることから、蓮は一物全食といわれます。大きく香気豊かな葉は、荷葉という名で熱中症や下痢、暑気あたりに用います。種子は蓮肉(蓮子)という名で、滋養強壮薬として、胃腸を整え気分を和らげます。処方では、残尿感や頻尿、排尿痛などの泌尿器の不調に用いる清心蓮子飲や、下痢などの消化器症状に用いる啓脾湯などに含まれます。

ちなみに清心蓮子飲という処方名には、「蓮子が心の熱を清す」という意味が込められています。東洋医学では、身体の機能を表す五臓のひとつ「心」は全身に血を送り出し、精神的な活動を主り



平等院を訪れた際の思い出の1枚

ます。その「心」の過剰な熱を清すことにより、精神疲労を緩和します。

ところで、蓮には「清らかなところ」という花言葉があります。泥水の中から咲き出しながら清く美しく咲く様子からも、その由縁はうかがえます。蓮は生薬として体内で作用するだけでなく、咲く姿も視覚を通して私たちのところに癒しを与えてくれます。

仏教の象徴である蓮や睡蓮は、古来より不変の美しさで私たちを魅了してきました。今まさに開花し始める季節です。蕾から美しく咲き、一枚ずつ散りゆく諸行無常の姿を堪能してみたいかがでしょうか。



豊隆は、全身を廻る正経十二経脈のうち、「足の陽明胃経に所属する経穴」です。

また、足の陽明胃経の中でも絡穴と呼ばれ、胃経と表裏関係にある足の太陰脾経にも影響を及ぼす重要な経穴とされています。



豊隆の位置

ツボの効用 豊隆 (ほうりゅう)

鍼灸診療部

伊藤雄一



位置は、下腿の前外側、前脛骨筋と呼ばれるすねの前面の筋肉の外縁で、外くるぶしの上八寸の高さ(膝までのおよそ中間点)にあり、肉が豊満で、隆起しているところなので、豊隆と名付けられたと言われています。

古代中国で記された、鍼灸

位置は、下腿の前外側、前脛骨筋と呼ばれるすねの前面の筋肉の外縁で、外くるぶしの上八寸の高さ(膝までのおよそ中間点)にあり、肉が豊満で、隆起しているところなので、豊隆と名付けられたと言われています。

「その病、氣逆するときは則ち喉痺し、にわかじん瘡す。実するときは則ち顛狂す。」

喉痺は喉が塞がること、瘡は言語障害、顛狂は精神の異常や躁鬱状態を意味しており、豊隆の異常が、これらの症状を引き起こすことが示されています。

さらに、「虚するときは則ち足取まらず、脛枯る。」とあり、豊隆に力がない状態だと、下肢が弛緩し、力が入らなくなるといふことが示されています。

医学において最も重要な書の一つ、鍼灸甲乙経には、豊隆について、次のように書かれています。

「その病、氣逆するときは則ち喉痺し、にわかじん瘡す。実するときは則ち顛狂す。」

喉痺は喉が塞がること、瘡は言語障害、顛狂は精神の異常や躁鬱状態を意味しており、豊隆の異常が、これらの症状を引き起こすことが示されています。

さらに、「虚するときは則ち足取まらず、脛枯る。」とあり、豊隆に力がない状態だと、下肢が弛緩し、力が入らなくなるといふことが示されています。

また、古代中国における、具体的な症状に対する治療例として、「厥頭痛、面、浮腫し、煩心し、狂して鬼を見え、善く笑いて休まず、外に発して大いに喜ぶところあり、喉痺して言うこと能わざるは、豊隆、これを主る。」と記されており、要約すると、気逆による頭痛で、顔面がむくみ、煩心し、幻覚が見え、笑いが止まらず、喉が塞がり、声が出ないといった症状に豊隆が効くと記されています。興味深い記述です。

が、現在の臨床では、こういった特殊な症状に対して豊隆を使う機会はなかなかなく、実際は、その所属経脈である足の陽明胃経上の異常に多く用いられています。

足の陽明胃経は、図に示したように顔面から頸部・胸部・腹部の前面、股関節・太ももすねの前面を下って足の甲・指先まで走っており、豊隆への鍼灸治療により、これら様々などころの痛みや筋のひきつれに対して、効果が得られています。

古医書のはなし

尾張藩医・浅井家の事跡と著書

北里大学客員教授

小曾戸 洋

尾張藩医の浅井氏は代々伝統医学の研究と存続に尽力しました。その功績のために、1974年には当研究所二代所長・矢数道明の主唱により浅井国幹顕彰会が発足され、現在にも至っています。

浅井家の医祖である盛政は豊臣秀吉に仕えた武士か

ら転じ、京で医を業としました。2代は将成が継承。3代の周伯は饗庭東庵と味岡三伯に学んだ後に私塾養志堂を設立。『黄帝内経』に通じ、『黄帝内経靈樞弁鈔』などの著述を残しました。4代の周迪は尾張6代徳川継友に招かれて名古屋に移り、尾張藩医浅井家の祖と

なりました。

5代の図南は浅井家きつての傑物として知られています。前半生は京都浅井家を守りましたが、父周迪の死にともない名古屋に移つてその跡を継承。多くの著述を残し、家学の黄帝内经学を敷衍し、また当時隆興していた古医方の批判も行いました。代表的著書に『扁倉伝割解』(1770年刊)があります。本書は図南による『史記』扁鵲倉公列伝の注釈書で、6代南溟の補考を加えて刊行されました。

6代の南溟は京都に生まれ、朝廷の医官となりました。のち官を辞して尾張9代徳川宗睦に仕えました。が、在職1年余りで父図南に先だち没しました。

7代の貞庵は南溟・図南の没にともない弱冠13歳で藩医を継ぎ、17歳で寄合医師となりました。医学教育施設(後の尾張医学館)を開き、奥医師に累進。仁和寺本『黄帝内经太素』『新修本草』の書写に尽力した功績も知られています。

8代の紫山は家塾を尾張医学館に昇格させ、多くの

門弟を育成しました。

9代の九臯は紫山の跡を継いで尾張医学館を主宰。奥医師、薬園奉行に累進しました。明治維新を迎え、一等医、漢学二等助教、名古屋博愛病院講師などを歴任しました。

10代の国幹は19歳で尾張医学館代講となり、維新後は藩学明倫堂の教官となりましたが、まもなく辞退。以後、漢方の存続運動に挺身しました。1881年には東京温知社の第3代社長に就任し、翌々年に上京して日本橋に和漢医学講習所を設立しましたが、1887年に温知社は解散を余儀なくされました。1895年には国会第8議会において漢方継続請願は近差をもって否決。1900年、国幹は名古屋に帰郷し、先祖の墓前に自撰の「告墓文」を提して漢方闘争の敗退を詫び、3年後に没しました。

国幹の死によって滅んだかにみえた漢方医学はその後、和田啓十郎や湯本求真らの努力によって息を吹き返すこととなります。

返すこととなります。

メディア紹介

〔雑誌〕

○マキノ出版『肩こり首痛を自力で治す最強辞典』
「東洋医学外来医師が推奨!肩こりと冷えに効く」
伊藤 剛

○プレジデント社『ALB A』
「ゴルフファースクリニック」平成28年12月22日(木) 伊藤 剛

○アサヒカルピスウェルネス(株)季刊情報誌『さんさんと』
「万病のもと・冷え」を撃退! VOL.8 伊藤 剛

○株式会社文藝春秋『週刊文春』
「冷え性」「乾燥肌」「はこう防く」伊藤 剛

○主婦の友社『妊活スタトBook2017』
「体の冷え改善!温活は体の内側」と「外側」両方から! 森 裕紀子(テレビ)

○フジテレビ『とくダネ!』
「冷え性」についてのインタビュー等 平成29年1月31日(火) 伊藤 剛

〔新聞〕
○読売新聞『医療ルネサンス』
「漢方で支える」平成28年11月15日(火) 小田口 浩

○読売新聞「お腹を温め丈夫に過ごそう」平成28年12月18日(日) 伊藤 剛
○日本経済新聞「冷え性タイプ知り対処」平成29年1月5日(木) 伊藤 剛
○日経産業新聞「解剖先端拠点」平成29年1月10日(火) 東洋医学総合研究所

東洋医学総合研究所 外来案内
漢方鍼灸治療センター

休診日：日曜日・祝祭日・年末年始(12/29～1/3)
ホームページ：http://www.kitasato-u.ac.jp/toui-ken/

代表：03-3444-6161
予約電話：03-5791-6169
(月～金) 8:30～17:00
(土曜日) 8:30～12:30
お薬に関するの問い合わせ：
03-5791-6167

漢方科 (平成29年4月～) 鍼灸科

	月	火	水	木	金	土 ^⑤	月	火	水	木	金	土 ^⑤
午前	花輪 ^① 星野 石毛	花輪 鈴木 石毛	花輪 ^② 及川 齋藤	花輪 小田口 及川	伊藤 ^剛 鈴木 森	小田口 及川 鈴木 星野 森 川鍋 石毛	伊藤 ^剛 石原 黒岩 小山	柳澤 石原 小濱 小山	石野 小濱 井田 黒岩	伊藤 ^剛 石原 小濱 小山	石原 井田 黒岩 小山 近藤	伊東 石原 井田 黒岩 小濱 伊藤 ^剛
午後	^{【冷え症 外来】} 鈴木	伊藤 ^剛 鈴木 堀田 川鍋	星野 ^{【鼻炎・はな 外来】} 石毛 齋藤	小田口 及川 五野	^{【冷え症 外来】} 伊藤 ^剛 星野		石原 井田 小濱 近藤	井田 黒岩 伊藤 ^剛 近藤	石原 小濱 伊藤 ^剛 霜降	井田 黒岩 伊藤 ^剛 小山 近藤	伊藤 ^剛 石原 小濱 伊藤 ^剛 小山	

初診受付時間

漢方科	月～金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00～10:30	8:00～10:30
午後	12:50～15:00	

鍼灸科

鍼灸科	月～金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00～10:00	8:00～10:30
午後	12:50～14:30	

再診受付時間

漢方科	月～金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00～11:00	8:00～12:00
午後	12:50～15:30	


鍼灸科

鍼灸科	月～金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00～11:00	8:00～11:30
午後	12:50～15:30	

漢方ドック

漢方ドック	月～金(完全予約制)
	9:00～15:30

漢方と鍼 第166号
発行日/平成29年4月1日
発行人/小田口 浩
編集/北里大学東洋医学総合研究所
漢方と鍼編集部 代表・星野 卓之
東京都港区白金5-9-1
代03(3444)6161



WEBサイト

※青字は男性医師または男性鍼灸師
赤字は女性医師または女性鍼灸師
※専門外来では一般の患者様の診療も行っています。

①：月曜日午前の花輪医師の外来は、初診のみとなります。
②：水曜日午前の花輪医師の外来は、第2水曜日が休診となります。
③：金曜日午後(第1・3)の伊藤(剛)医師の冷え症外来は初診のみとなります。
④：第2・4金曜日のみとなります。
⑤：土曜日の外来は交代制となります。スケジュールはホームページまたは予約電話へお問い合わせ下さい。

(制作/傑博愛社)